完本『春雨物語』を愛惜す

漆山又四郎

らつに『春雨物語』と云ふのは上田秋成の著書をいふ、高井蘭山の同名の讀本を云ふのでは無い。秋成の『春雨物語』は京都の富岡家所藏で、しかもそれは秋成の自筆本である、といふことは、故藤岡作太郎博士が校訂して富山房發行の名著文庫中に收載して以來世間の事である。自筆本とは云ひ乍ら稀覯の本であるが、惜いかな十周知篇十卷のものが半ば散佚して五篇五卷だけしか存してゐないとの事である。それが為めに名著文庫の未刊行會の上田秋成全集・岩波文庫の癖癖談合綴の春雨物語等いづれも『血かたびら』『天津をとめ』『海賊』『目ひとつの神』『樊噲』の五篇のみを載せ、中にも長篇の『樊噲』はその半篇だけのものらしい。そして國書刊行會

特別
イ4
3159
A21

では春雨物語 十巻（内五巻今不傳）寫と断
つてゐ、岩波文庫では校訂者が『春雨物語
は、もと十巻あつたものらしいが、筆寫して
傳へられたために、早く散佚して、今はわづ
かに五巻を遺すのみとなつた。それも知られ
てゐる限りでは、現在京都富岡益太郎氏所藏
のものが唯一の傳本である』云々とあり、

特別
イ4
3159
A21

No. No.
YM原稿用紙
10×20(B)

桂窓子。伊勢小津氏

藤岡東園曰く、春雨物語は上田秋成の著なり、従来未だ嘗て刊行せらるゝ事なかりしが、近頃の事とは世人のありやなしやを知らず、物之本江戸作者部類に曰く「上田秋成が戯墨の讀本は、雨月物語のみなるべしと雖、春雨物語とあるべし、一回毎に世界は異なりて十回あり、此書印行せず、傳聞の本も、世に稀なりしに、桂窓子（ちゃうし）いまだ其書ありとも知らざりしに、甚後数本を見ず、当年備書に寄せて、藏弆すと、予者にいひしかども又得がたき珍書なれば、いとゞ俗賺せまくほりす、よりて録して同好に示すのみ」

作者部類は曲亭馬琴が名をつくみて編纂せるものと稱せらる、馬琴はいくばく秋成と私淑せるもの、さればこの物語を見ずといふは当時のありさまなり、稀世の本なりしを、推して知るべし、ここに刊行せるものは、寛政の作者の自筆なるのみ、京都の富岡猶三郎の珍蔵するかゝる。所載、巻数のいと多きものとて極めて自在なる煙草入を開きたつかと思ふ。かゝるものゝ世に出でゝ今は五巻を存す、最後の巻の巻末に付き上とあれば、この巻は上下の別ちしなるべき歟、その上巻は失せしもの歟、諸本なくて、この珍書を公行するとなるべし、校訂者の為に、慎でとゝろうるとなり

雨月物語、秋成が十年の作なりて、春雨物語は蓋しその晩年の作なるべし。彼が俳諧に意を用ひ、此も著

特別
イ4
3159
A21

り任きて手を拍て顧ゝず、一は迂闊、一は直截、艶麗と
光蒼と、二者その品を異にす。善悪の後者い而月の
花やすがるを面するものの多の感ずしといへども、趣味の熟
しさるものゝ或い春面の移ゝるを待ち難しとせん。
女性の海賊の導のかき、当世の学者女人を痛罵する
止まらず、攻撃の鋒を古代の歌聖にまで向ふ著者の
性癖をうべくしるべく、まく樊噲の傳のかき、道徳主義遍
満の世に、ひとり潔の著ゞ社会と相戻れるを憐むべき也。

（著者序文より抽出し抜粋二十八年春面白庵題）

特別
イ4
3159
A21

背振翁傳（茶神の物語）

雲水よたぐへて筑紫にゆき師おはすと聞きてはろ〳〵出でゝつ春山の峠づたひ、日影ほのぐらくと温かなるに、汗こき性の渇をおもへど谷遠かりゆく手に大なる巖のひまより漏る雫のまづ嬉しくて、手をくぼのにして受くれど、僅に唇うるほすばかりに心ゆるずのうしろに人あり。よき水ありかし歩ませとかふ。見れば六十あまりの翁なり、いづ方にか参らんと、あとにつきて行き至りて見れば、おし伏せたる庵の門に岩井の玉なはしらせて流る、、笠もぬがで立ちよる、是にとてしろき瓦盃の盈さゝ出て與ふ、あうでも人もとゝのみし古ごと思ひ出らるべし、猶去り難くするを、清くとも水は宴あり、茶菓のてまゐらせんといふ。今は汗も高ひ、咽渇ひしのぶ、しばし足休めまと立ちよりて見れば、土のうへに山菅の席二枚敷きのべ茶寵一つ築きたる外には物も見えず。翁小栄折りくべくゆらす、瓦の釜やゞのて涙を躍らせたり。木の皮曲げたる器より茶一つみさゝぎて投げ入れ、よしと獨言して、さきの白きに汲みて與ふ。色すゝりて香も味はひも、ついに試みぬには又三盌を尽す。やゝ〳〵心づきて翁に向ひ見れば、色黒く、目鼻口あざやかゝ、遂に病せぬ人とこそ見れ、かゝる里ばなれたる所に、のどかにて住みつき給ふいと貴し。在りて久しければ人恋しくもあらず、稀ゝ里人の来て物いへど答へず、唖ごろにてこそと、指ざしして笑ふ〳〵去る。山深ゝらねば木立茂

特別
イ4
3159
A21

うらず、さぐれまどりの窓封い雪の根なるもあらずてよく晴れくらり。このいぼり続りて孝の木あまた生ひつきを、春毎に心なぐさに掘こて納む、今すゝめしは高年なりやいふ。いつの年いづこの人のこゝにおぼし入りて住ませたまへる。山中すは唐あらねば、鳥の声草木の葉ゆゑ時を知らるれど、数ふるに用なければ忘れぬるなり。わがこゝぶすま国はひろくの海を隔りてあなたなり。此国の大徳の帰らせるに強はれてこゝに来り、宋といふ御代まてありしが、わがの祖は葉氏にて唐帝の仕へ、一たび身をのがれ又退けられしうど、遂には用ひられぬるなり。かの大徳こゝに一やすらして又郷とかへりさたまへるに、わがはらからどもは附き従ひて遠く行きし後、かしこより便りて思ひの外の世を逢ひて、祖先の名おこすべき時なり、さく出でたらせよと言ひおこせど、人の面目といふも、まゝそれにつきて立ち帰り煩はしき事ありと聞くには、答へもせずさふふ。さはもろこしの人の思ひのみずこゝに住みたまへるなり。めづらかに物語りて聞かせたまへ。いな、かしこにたりても世に交はらねば語るべき事もなし。あなたふと、儒佛いづれの道よりて、かく行ひすましたまへる、聊にても教へ知らせたまへ。いな、さる事露ばかりも響ばねば聞え知らすべき事もなし、佛といふは本師の旨を今はさきぐに説きて千まに分れしとや、あた煩はし、儒も亦智略文史理数任侠の心ことに劣らるは、吾は道徳の儒を修しならんといひし人

特別
イ4
3159
A21

もありとも、さろ人の名、後にのこりも傳へず、一條ならぬ道を底なき耳を穢きて何せん。たゞ江門の岩井を心澄ますにて、生きんさも死なんさも思はねば、寒くも熱くもあらず。僧かしらを地にくぶし手揺り合と九度拜して、佛とはまこと知るまてこそおはすつれ、世を厭えし師も思へば、かく首りすらさ事張りも笑うせず、御許はありて心を使せん。しばしたまへといふ。いなく無益なり、今いひし外に心もなし、是休めくらは疾くもれ。らはたまはりぬとて、心ばすりをとゞめて出づ。後まさらさを尋ね入りて見れば、あるりしを岩井の澤きかへりて、庵あるりしと見て跡い老いらる苔の木の花をさすりと咲きしより外に物もなし。さてはこは菊は苔の神なてこそおはけれ。むかし深西禪師の宋より帰らせし時、茶の實あまた取り来て、背振山（筑前早良郡脇山のうしろ山）といふにまづ植えさせたりとぞ。こゝ甚山こそ。都にもち帰りしは、嵯峨の帝のあとにつきて、山城近江の二國にもはら植えさせしが再び用ひられしを、はらからが面目なはいひしふ。いとめづらしき事なりしき事とて、先弱きうり是に物狂はしさざかりて、萬にすぐるものみ首りしい世り落はふれ十年餘りこなるは、そはるつきてはれぐと憂事のなるまま、歌や文も拙き言にまぎらはさしてどいやいつきてかくて終らん事の悲しさに、世一巻ゝとゝもりめるも、語言なぐらるなん。著書滿行注解若干編ことぐ能の吉井にしづめて快くさます。次。

語りしと云ふまゝを聞くまゝに書きとどめぬ。

文化五年の春正月　隱龍山下の老隱無陽七十五齡書

特別
イ4
3159
A21

捨石丸　第七回

鉄

こちのく山と英の色さくとすみし　今は小田の毛芝と
りふ原のさてはるを世と工とする原原より父の工鉄と
何ゆも子のの傳と云ふつりさとらせる砥のこと拾
ふ姉のをとこなりりに花よゆうさ拾て行ひのこと
る本の小傳者度と拾さへひくい原の子行交と武こ
ほしとと文りのよろうひ拾石丸とる男あり腎五
尺の上る身と横ふとりて力牛馬ゆこえのく荷ひを酒
くらひさい路山ひきなくて ふしくる砥子ひきの（中絶）

捨石丸

鉄

特別
イ4
3159
A21

春雨物語序

源氏・狭衣等は実相なり、実相なるが故に日常茶飯の事、捨てとするに足らず、雨月・春雨等は架空なり、架空なるが故に奇巧往くところを知らず、造化の子の存ずるところ、偉人の目を以て補足するものなり、と見るべし、偉なるかな雨月、大なる哉春雨。次を序とす

昭和二十三年六月　深山天童

櫻井書店原稿用紙
S.1　10×20

特別
イ4
3159
A21

仲麻呂の乱に取りて功ありし人々は但し当年中の功ありしかは功ありしかは

取りたる人々は失ひ

例の仲麻呂の謀叛

訥くまこと

世に捨丸が雄なるあ

僅に一茎、樊噲が皆世の為

又

春面勢は成多むの血かたら

ゝれば春面茎ゝ嗚せる

明らかなるおかも

ゝれば富士の新宮

モリ

日、(一)血ゝびら (二)天津乙女

(三)海賊 (四)目ひとつの神 (五)樊噲

ト心を本の (一)目ひとつの神 (二)天津乙女

(三)海賊 (四)三世の縁 (五)目ひとつの神

(六)犯罪の笑話 (七)捨石丸 コレハ目あリて左文欠

(八)宮本武蔵 (九)歌のほうれ (十)樊噲

コレモ本文欠 を以て

選定すれば

(一)血ゝびら (二)天津乙女

(三)海賊 (四)目ひとつの神

(五)樊噲 次上富士山ニアリ 但シ樊噲の下半等欠く

(六)犯罪の笑話 (七)捨石丸 富士山モ

欠ケ仲麻呂不明

僅に一茎のみにて始まるなるべ

選定すれば
(一)血かたびら　(二)天津処女
(三)海賊　(四)目ひとつの神
(五)樊噲　以上富岡本ニアリ　但シ樊噲の下半帖欠く
(六)死首の笑顔　(七)捨石丸　富岡本も　小生本も
欠ケ　但し後半本にあれ共　僅に一葉のみにて整はず
(八)宮木が塚　(九)歌のほまれ
の九篇にて樊噲が二巻を合せ
都合十巻となるなり　指定本は
佐藤本の他の長者長尾　草稿
物語は春雨物語中のおもなるもの
ものは富岡本にある小生のものより　其の
目にも見えぬ上にて　長尾本は　八文
字屋本の文辞にて　春雨物語中の
ものもなく　草稿といふのは　秋成遺
文中より載せる　皆桜山の富岡物語
そ所こうるもの　併し　一二篇のみ
まで云ふ定本のまゝ　文章物語
とふ佐藤本は　今宵昨夜如遠思函
中りは定　當らず　遺墨函佐
血かたびら　天津処女　目一つの神
の三篇が　錯定全てと致存し　此
の三（此篇をもりて桃郷するに）篇は
海賊と共に富岡本を用ひて
一方を参照しつゝ　よりて　今日日本
文学大系によるものは　富岡
本のおよび佐藤本の　断然春雨物語
と目さるゝ　(一)二世の縁　(二)死首の笑

寄のてびら　天満宮　且つ神
の三篇が精密なる考証を施したる此
の三篇（別篇のみより抜粋する）篇は
俳諧と共に富家本を用ひて
平安朝の文学のすりて今日の本
文学の大部は富家
本のみを基本とせり　断然春雨抄
と同さまに（一）世の俗（二）死者の美
（三）言霊の信仰（四）歌のみちの富
を減ず　出版すること
うべくとの
事目次あり　捨石丸は本年
は全く世に文学の興味は全く
に遺憾なり此の二篇を謂望せ
ざるべからず
実に全のまの世にいつか
考を加ひ出るまで
返るべきなり
吹く接ぬと雙璧の下篇
望みなしとなれば代表的の
合想全く無きなり
は表面的に新しく
本より作者の
のてびらの天満宮の目ひとつの神
の三篇を富家本との京間出入を
綱ぐ　あげ世ふなども考書に
ルてみるのものなど
吹く他のなどく作者は
富家本より前は書き置き

の三冊を富士屋本との京岡出入りを
調べ、まず世ふなども考書に
入れるものなどの外
他の仕方式本は藏
富士屋本より前に書き置き
ものと推察されし 仕方式本
無のうちなどは同じもの
二冊もあるも(一八六四年)いろ
推察されし 富士
右の文面
本は実金の
つも 写本せ 者が 著書の潤
さより 潤 貴の間 ささ
コ按ずるに今三冊ト樊噲金毋三
冊富士屋は按ずるのみ 八年中
ある 三冊 作 乳
三冊が好 歌のうちの冊
せく 樊噲の三冊
も 樊噲の三冊一巻
者 ちは
乱文拙筆
御容赦
四月廿日 清山
仲長統

乱文ヶ判ニ候ヘ共おこゝろの内
と存じ候ふ左様ニ哀を御覧
富士山
無かるべし
天津乙女
海賊
目一つの神
樊噲 上巻
以上

薄山
無かるべし
天津乙女
海賊（識語アリ）
二世の縁
目一つの神
飛騨の笑話
捨石丸（目次ニハ本文欠ノ）
宮木が塚
歌のほまれ
樊噲（目次ニハ上下篇共欠ノ）
以上

伊賀氏
無かるべし
天津乙女
目一つの神
捨石丸（僅ニ初丁一葉ノミ 但シ不確実ノモノ他ニ二篇アリ）
樊噲（下壬申の乱ニ長者長屋ト茅葺物語ハ書名ノミ残ル）
右ハ
目一つ
右ハ
伊賀藩太郎様

東京都千代田区
永田一ノ橋三丁目
岩波書店（文庫編集部）
玉井乾介 様

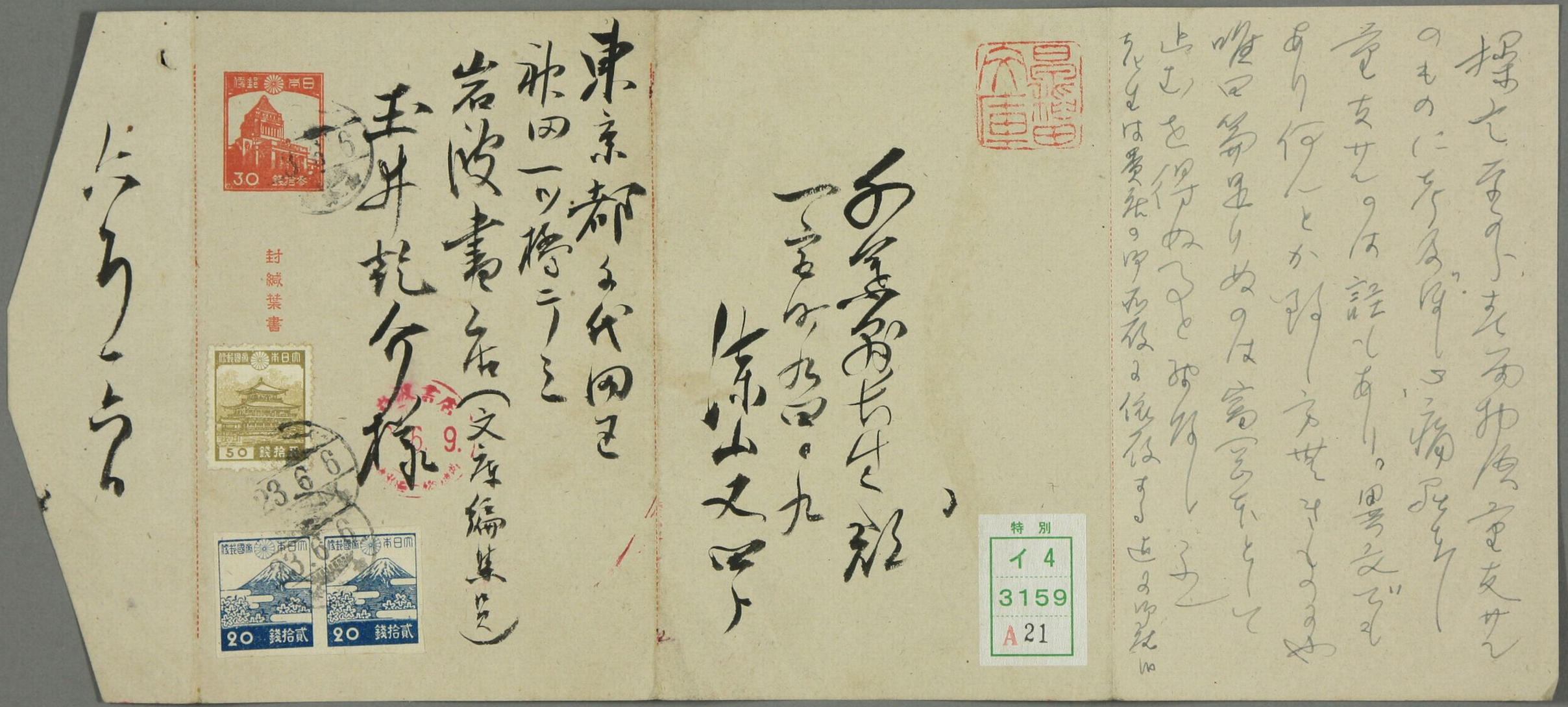
封緘禁書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



特別
イ4
3159
A21

東京都千代田区
永田一ツ橋二丁目
岩波書店（文庫編集部）
玉井乾介様

封緘禁書

却説今朝中又幸状拝受感銘
仕候今若干無さしく一時々録、
病剤を以て断くあえず打切
春風社は富家氏（富岡文弦仕
用）より四等号にて発刊
ねらいなりしの体しるべし
既刊の重友先生の歌集は
ぬるとの事。なお富家氏と断り、
先生のは清氏と断りて二冊の出
異文みなるべし（第五の巻
故伯父は後人の中任せし
注書先生のみ比較せば、勝るものなれど
なれ先生なる寛氏と共に
とたるものなる元孫刊とは趣きを異る
とみるも有
作るまでに出へ中第二編（巻、陶淵明
集印税のみ金計算の中法知下
て御案内之通、一宮銀行之売
中送金所なれば、金送義文の文渡
しなれば面様の中新聞紙
貴方より中金傳新聞紙
先生病所中何も一般送中中
送金の往新聞紙と勝るべ中
清氏新聞紙の事
宮家中刊後新聞紙
六月末

○春雨物語解題

春雨物語は上田秋成の夢物語、従来未だ重て刊行せざるものなれども世に知られたる物語の心を敷衍して作りたるものなり。

上田秋成が雨月物語のごとく、春雨物語は、雨月物語の十篇に対して、十篇を一回毎に出版せんとせしものなるべし。

特別
イ4
3159
A21

えたまへり。こゝに
四月さば、御ふみ
給るはべり、已はそ
のかたはらに
とゝのへぶりて、桂宮子
（縁を云、御縁の
人か清也）
心ちのなやましくなる事
なりし、その時
なれば、ものをもえ
なんとせず、
第一に備ふ

奉すと、こゝろ
たはかるき所
侍勝さはくほり
除して用ゆ
心ち部屋、典
をつゝみて縁
侍らん、
秋なゝ私

ど考ごとの御座を
なれば、姉さのなり
しこと、持して知らず。
こに利用するのいろ実々
世さの生ものなり京都
の富豪論三ぎの教義より
殊教も美物ますて、基礎も
かきがなりて極めて生活
よりも煙戦上の傳き立つ

と言ひのもと十数年
もうべ、ばは五年
を存ず、最後の解答の速
什三上とあれば、この表は上
下三別ちしなるべき我等
ばまの供すこの友達さ
富豪の快社会を作て、この
作者を作まるを

ちは、校訂きの花を捨へざるところなり。

[illegible]ぎ[illegible]の[illegible]を蓋

見のて、[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の晩年の[illegible]の[illegible]

文化五年

[illegible]を用ひ、[illegible]を

[illegible]を[illegible]、

一は迂闊、一は直截、艶冥

と花奏と、二春その月を

[illegible]ん。[illegible]面の情を[illegible]

月の花やうなを[illegible]

[illegible]のうたとしても、趣味

の[illegible]しかるまゝ或ハ[illegible]

の[illegible]をなび雅しと

[illegible]の[illegible]の[illegible]

き、弟さの[illegible]文人と[illegible]

屬するに止まるべし、攻撃の
鋒を古代の歌聖うまれて
如何なる性格をもつ
べきかの問題の解釋
を通俗の方法、
ひろく流布の方法と相
乖れるものとなるべし。

（後記したる所の論文
は二十八年美濃国に載
せる所なり）